

風流仙傳 全

八公抄

13  
1963  
18





富ハ人の好所<sup>このい</sup>貧ハ人の悪友<sup>あくとも</sup>生ハ多の  
 死ハ怖<sup>おそ</sup>也。貧ものハ富を羨<sup>うらや</sup>むと  
 とも其才<sup>ち</sup>安<sup>やす</sup>く苦<sup>くる</sup>し富る者<sup>と</sup>  
 栄花心の修<sup>しゆ</sup>ありとく<sup>く</sup>も其才<sup>ち</sup>多<sup>おほ</sup>く  
 一<sup>い</sup>苦多<sup>くる</sup>一<sup>い</sup>亦死を怖<sup>おそ</sup>の人<sup>ひと</sup>欲<sup>ほ</sup>  
 十倍也。其<sup>その</sup>何<sup>なに</sup>を是<sup>こゝ</sup>少<sup>すく</sup>一<sup>い</sup>以<sup>も</sup>づ<sup>づ</sup>修<sup>しゆ</sup>を  
 抱<sup>いだ</sup>と<sup>と</sup>月<sup>つき</sup>八<sup>はち</sup>坂<sup>さか</sup>川<sup>がわ</sup>の流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>



くさくさ  
中よ時くの人気がかりきもの  
るが時<sup>トヤ</sup>と捨<sup>ツ</sup>捨<sup>ツ</sup>ると有ハ天地の變  
化也。其變化も持とつども人生もつづの  
り——き。無常<sup>ムジョウ</sup>能來<sup>ネライ</sup>はるものう  
を返<sup>マゼ</sup>返<sup>マゼ</sup>らるもあ——。乃<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>昔<sup>コト</sup>もよぶ  
美<sup>ミ</sup>よりうぬ<sup>ウ</sup>ぬ<sup>ウ</sup>このあ——<sup>コノ</sup>あ<sup>コノ</sup>——<sup>ウ</sup>禱<sup>イハヒ</sup>づふ

は——づ。唯<sup>タラシ</sup>仙人<sup>センニン</sup>もふもの阿<sup>ア</sup>里<sup>リ</sup>く生死  
のさ<sup>サ</sup>のあ<sup>ア</sup>を知<sup>チ</sup>——づ。あ<sup>ア</sup>を美<sup>ミ</sup>次<sup>ジ</sup>知<sup>チ</sup>かりしえ  
貧<sup>ヒン</sup>を悔<sup>クハ</sup>るあ<sup>ア</sup>——<sup>コト</sup>も形<sup>カタル</sup>——。彼<sup>カノ</sup>仙人<sup>センニン</sup>  
あ<sup>ア</sup>ぢ——<sup>ヤ</sup>あ<sup>ア</sup>——<sup>タ</sup>此<sup>コノ</sup>が<sup>カ</sup>き<sup>キ</sup>も<sup>モ</sup>思<sup>シ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>る。  
春<sup>ハル</sup>の日<sup>ヒ</sup>が<sup>カ</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>く——<sup>ク</sup>——<sup>ク</sup>を<sup>ヲ</sup>机<sup>ヒキ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>く  
ア<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>眠<sup>ネ</sup>寝<sup>ネ</sup>を<sup>ヲ</sup>心<sup>ココロ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>も<sup>モ</sup>る——  
修<sup>シュ</sup>を<sup>ヲ</sup>枯<sup>カ</sup>め<sup>メ</sup>——  
中<sup>ナカ</sup>よ<sup>ヨ</sup>あ<sup>ア</sup>ど<sup>ド</sup>あ<sup>ア</sup>よ<sup>ヨ</sup>川<sup>カハ</sup>——<sup>ク</sup>其<sup>ソノ</sup>



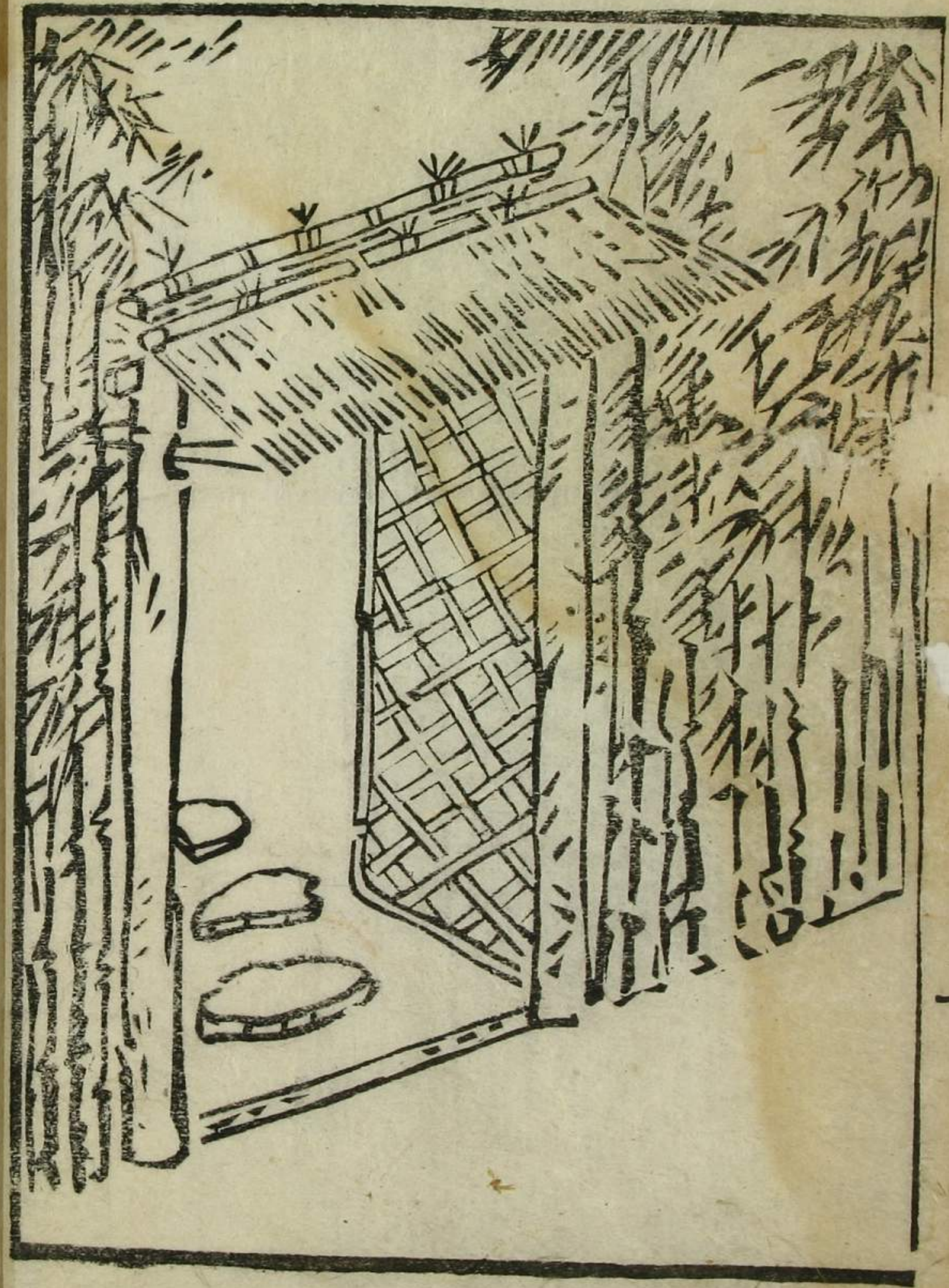
さうか〜〜〜い〜い〜い。髪ハ尚世風のも〜系  
本田馬羽二重こまてかこ。小袖替り八丈の下着。あ〜あ。の  
とあ〜小紋もん。細うげちほその紋所もんじょうはけ〜は袷羽織あせせしぎ  
むハ茶色の帯おビ。〜あ。鯨さめさやの細ちほそ〜ら〜の  
裾すそ〜。南京なんきんさ〜の紙かみ入いれ。信音しんねをう張りはり  
ぢ〜がんのき〜あ。や〜〜の〜〜はけはを〜  
何〜云い分のあき大通仕立あつうしだてのむきこ株くわ何なにも〜不  
あ〜もあ〜。〜〜と出〜〜。尻しりハ馬うまハ〜

を雀さすハ〜あ。の友ともあり〜。年としのあ後ご三十  
むら〜あ。色いろ何なにさ〜く。髪かみ大おほぢ〜〜あ  
か〜。は梅うめ射や。医い者しやも〜。又また茶人ちやびんとも  
訛まが語ご。〜もは〜のぬぬ。浮うき世よのあ。ふをんらのあ  
はきもの。や〜んやん垢あか色いろ。〜〜。合あ。是こゝハ色いろ男おとこ何なに  
〜。由ゆ玉たま夕ゆふアアも公こうのお〜。さ〜多た〜。〜。町まち〜。今いま  
〜。里さと〜。〜。止とど。あハ花はな前まへの森もり里さと。所ところ。〜。茶ちやの  
湯ゆの糸いと束たば。系けいも〜。ま〜づめの訛まが語ご。〜。あ。終はつ





義明画







此の如く  
一、  
藪阿久。其中一ツの茅門あり内へ入るん  
籍え。まゆけ根布川の死石は六去閑ま  
あだ入口阿久。二くうハ雨も濡路の宿ぐ  
み市もむーハ地もくかぐくぬるの菌も  
合ばあまーくあううああをらふ肉よりあ  
多くまゆるハ十二三ぞうの切巻の巻も  
いそれぬらうーきが何からうりあむらう

何の何期と多うぬれハ二人うのものハま葉を  
せ後へ。これハ今日死巻山ハゆらんハ  
ものあうう。依雨もあハあんぎあーや  
くまもくハあうーあり。おあさけま  
あまー雨書まー多くとえ。あま  
下まのーと云ハる。巻ハ肉ハ入ハ跡もあ  
り。あんと多うまむらち。あく深く琴の  
あまのま。あまのあま人の隠あま

やうきもの——く。耳をきぬ——く。楽居  
らまの前の——ハまわくあかしくさう  
あきらめ——と薬肉もけけく行子。指管と  
あび——記味あへ通し。其抽好風流さ月  
とあびの——云葉あまのべはく——かきく。  
先床よ書海の一抽二重切の花入る牡若も  
あげ入書貝の唐机も孔雀の尾風もむるか  
えを。其外文甚堂香通具哥書物語の双鏡

ども。かきえんのたみハ、炊み父王急くおきり  
鳥のまゝさう音琴。三絃胡弓鞞笛太鼓ま。  
極ひ道具あらう方あくせりくくまかきま  
付。抽庭よハ物好の極あも何至せめあ所  
さハあくく。細き流し。秋まをくく。山ご  
まあがく今をさうま子。咲まけれと家其  
風情。ゆ——あしやんまも云葉あ  
もはく——かきく。日々此肉ももけやうか

世思も何とどのうとさあしむもはしむも  
物もあぢくぬあつゝい前の壳ども多をお  
盆茶あともちあつゝあづー何うとさうと  
かぢりー地々う記年の祓二十よさぬ女の  
柙の姿ゆふのかんぞせ其うはつーま粧  
と後あーの楊貴妃日本話小町とちあとも  
むー風まく中く何ううへるはくする  
もかあうは白むくかまゆの下着よあま

小袖まきとあうめうさうのけ舞の圓まぬ  
ゆりあくまゆのまやれいあうま粧ー二人  
とど後ままとあまもりまゆあまういあ  
だかあまんとあうあう思ひかけあまあめ  
もーいさあううあうれーさうけあうあ  
まれを道まうく雨よああいあきれーあ  
さあ／＼ああんまあきれーとお舞のせ  
くまあんーああるえううー記まび任





世にまゝも。それくも世の中も何るかわるのゑ  
子——と大ううまはく——争うとかもひ  
——うとも中くや——の風雅なる所身のうゑ  
一生もハおちくぬるやうに思ひするも自身の上  
明さきくひきしう——とをいふ。あつ——の云  
つくましくいおきお記お目も——みはくこまふ  
さかやうもか——。づううう親をいひきくも  
および多まらん支那は三帝とて著者なる

——時京嶋原の松中もあつ——。あつひもゆき  
中とあり常ありぬ身とありまゝく産あつや  
——ハまううう也。母ハ尚もあつ身あつうゑ。  
お其の父の係三帝ハ世の中をうとて生涯を  
かかへん——。改を判る名を宗繼と改山崎  
の業は門子引ひき居るう——。あつ日近  
清々う後へ道遠のあ後。去法師あしる者  
ありと彼業の産へまづ終つてをむおらるゑ。

やじはらの川は法師むとく通州やま  
あどく。其後の池乃多く入水鏡る  
は里々家さゆを

宗ツネ繼ツグうまのこを名よやつまつを  
下ま川しよやう河へは

のまんとまれを其の汲水とほふまつ  
まら家あ。元政上人の隱逸傳に宗繼  
傳も入くく記を。け汲水の掘凡俗よつる

毎家平心河ととくのがのれ伝るあやを  
かおあくおもひ。山崎の仲庵は古書と法衣  
をツネ繼——行方志後にはあまら家。秘さく  
八ヤチ樓山へのやまのあるまやんツネ通ツネ力ツネ自  
左サの力とあまらく。秘の力へもあくはよ  
——。おまうのうら公年流もあう——のえツネ聞ツネ  
ろくお後くあまのくあやま父のかあこと  
殘——とあち感と一勾のツネ經ツネ冊ツネ

か——夜美の神をやはらぐを——姫師  
君をよ——は恋——さの。何とせ父を道に  
影の——ぬ神もあまき平よ。初瀬のお山へあも  
まくの歡喜の道引まきくゆ——起る親よ  
免ぐり合。彼纏柵をまき——まきく親よ志  
多いめんあせ——するむとくは初瀬の道まき  
あり。其後父のせ——山崎の道庵を出  
——ようハ陽山へのがま。多年の念形まき

志を——く通カ自立の力とありあり。世の  
方今まきくや——あましとる父母よいとまどと  
山崎の草庵よ二夜住居つらけ——  
力の徳よとる世の方女あつらも自立の力  
とあ——しつまきくも命つきのひく世乃中を  
心のまきまきくさせん。さるまの——煩悩の心  
さ——何れをまきくも代通カをう——あひも  
よの人間とあへ——久米の仙人まきく女のを記



の白を足く。か。悩のんの心ああり通つうをう。一。おひ  
下界かへか。一。多め。一。も。阿。ま。お。め。く。は。く  
志とおあ。う。ま。か。と。く。ま。一。く。お。し。く。ま。の。し。ま。の。  
夫つとより山さん濟じの仲なつ。高たかみ。多たげ。子こ。行ゆ。父ちちと。一。取とり  
位ゐ。通つう力りき自じ在ざいを。う。け。は。る。く。今いま又また多た子こ位  
居いか。一。年ねん。う。あ。る。も。あ。あ。く。ま。い。く。年  
る。く。も。け。面おも。親ちか。世よ。中ちゆう。子こ。昔むかし。今いま。あ。る。と。あ。る  
由よし。あ。も。一。後のち。い。る。う。め。づ。く。一。ひ。る。う。思おも。う。

あ。あ。聞き。う。う。の。ま。く。ま。ゆ。ハ。何なに。も。は。け。く。も。不  
足たり。あ。ま。世よ。ま。く。る。も。父ちち。う。は。さ。へ。一。通つう力りきの。位。  
途と前ぜんの。牡うし。若わか。ハ。父ちち。う。あ。い。ま。一。物もの。あ。へ。四よ。季き。と  
ま。の。う。け。は。と。を。う。る。ま。思おも。せ。一。も。父ちち。も。あ。ん  
由よし。あ。ま。一。お。ま。う。う。一。か。う。う。う。う。う。う。う。  
力ちから。あ。く。か。く。の。ま。を。う。と。物もの。う。う。水みづ。ハ。人ひと。ハ  
横よこ。自みづか。ま。く。う。う。ち。お。ハ。傳つた。へ。守まも。り。多た。宗むね。繼ついで。子こ。の  
は。息いき。女むすめ。と。名な。の。ま。う。う。う。ま。は。力ちから。の。う。く。お。月つき。ハ

かき書も多し。くう方のまゝいふ。ぞくももの  
る。あけよ。——今の世の中のもの——  
起るもの。つるも。け多。あ。ま。夜。と。き。業。を  
揃。云。り。れ。も。女。の。身。も。く。か。や。も。あ。さ。は。さ。り。あ  
は。と。あ。さ。け。——も。ま。つ。の。——ら。れ。と。お。れ。  
し。何。ハ。か。さ。く。さ。と。あ。ゆ。——あ。さ。り。下。さ  
る。——お。お。二。人。り。さ。ゆ。と。な。ま。は。る。よ。髪。の。こ  
ち。あ。ら。か。ん。形。ら。う。が。あ。ん。の。あ。ま。あ。世。を。大

雅の通具也。今の世ハ詩人ハかきく。く。多ハ  
終。に。何。も。い。ハ。毛。屋。人。あ。ら。と。笑。ひ。哥。人  
古。風。也。連。哥。師。ハ。や。和。也。と。く。高。世。ハ。唯。雅  
潜。の。を。風。種。と。い。ハ。松。女。神。帝。飯。と。う  
ま。く。う。雅。名。を。は。け。の。あ。は。ま。あ。ぬ。あ。あ。あ  
ま。ま。——。——。——。——。親。宗。繼。ハ。連。哥  
師。う。の。ち。雅。踏。ま。ん。を。い。——。あ。——  
あ。く。う。う。ら。も。あ。う。の。け。を。——。を。う。け

終りまゝしころ。元祿塔ハ連歌まじりと  
此まのころ川とも新道しんみちより出るもの  
まゝをめらぬ歌と云ふものあり連歌  
と云おあるも——ものありしは。又もろこ  
——の清拙しやうせつともハ真室まろむろの多ハある  
まゝ今此世の志や終らざるのやあり  
もの也。日本のもあふふむと——死と生も  
まゝありしは。付つきしころ——伊勢いせの寺武てらぶしより

ち——る。花の本はなの本を貞徳ていとく老人らうじんより貞室ていむろ  
みゆまは。其はか——けあくも時の御門みかど  
の殿とのまゝまじり——するありき。ま  
りま一袴ひとをほると御威みゐのありま。画工えうこう探  
幽ゆう法ぽうを乃のかりは曙あけぼのの御掛物みかけものを貞室ていむろ  
下——るはる其時の夕ゆふ

ゆきの敵たひまか——る。春の山はるのやまに  
吟ぎんはまを——く天下是てんかぜを花の本はなの本家け近ちか



かや〜〜一〜〜ハハハハ〜〜もハハハ何  
う角力〜〜セ傳んおつりか〜。風流ハ  
〜〜武を於まて家を〜〜はま。事の衣を  
おもひ月雪ふん〜〜をさぶるあり。  
祕譜の中意ハ一巻の怪を〜〜三句  
の〜〜とかん〜〜一白の付方心〜〜ハ  
〜〜を〜〜一坐一巻を〜〜の〜。其  
友貴賤の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

おま〜〜と具也。さ何〜〜と面を〜〜のめ服子  
角を立山川と何〜〜夜軍の合を  
葉の〜〜〜〜。又ハ筆句を二三白も四五  
句も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
何〜〜好や何〜〜道具具や〜〜  
〜〜。尚世祕譜とあのむ人語や〜〜風

雲子うんこを向くむかのまは東門とうもんをこぼれこぼれ續つづけ  
錦きん繡しゅうを牙がを向くむか由よし口くちを珍ちん味みを何なにに  
於おけへけりけりいふいふあまあま川かわにやの改か取とり  
らるらるいふいふあまあまややんんああいいをを送くわ送くわ  
ふふととりり竹たけ片かた田た舎しゃのの茶ちや種くさねををああひひの  
何なにとといいううままををととるる一ひとつつののままををああど  
々々ああままををきき友とものの買かひ茶ちや子こじじふふざざんんととああが  
ええぬぬおおとといいははぬぬくくううややああままのの買かひええととも

能のう入いにに偽いつはりをを改か取とりり免めん地ぢののふふままくくのの新あらた  
ちち清きよつつをを新あらた庵あんとと名なををととりり取とりりくくささうう腰こしに  
ままささとと雪ゆき駄だちちややくくいいぢぢぢぢ一ひとぢぢのの  
取とりり足あしををくく。脈いんのの引ひややいいままくくははおおううくく小こ  
前まへををかかけけ産うぶ婦ふのの癩いん癩いんのの茶ちや疔ぢやう瘡そう疔ぢやう瘡そう疔ぢやう瘡そう  
気きのの茶ちや利りもも茶ちや毒どくのの了りやう記きめんめんよよ足あしををささすす  
八はち時じのの仕し合あひひ一ひとくく活いききををつつのの病びやう人にんハハおおのの  
ははののくくやや命いのちををいいららるる南なん條じやうのの茶ちや代だいは

口持をとりしるしにけり。名匠也とかもひ  
伝ふ。本草と云ふ名ハ忠臣蔵よりくおぢえ  
多し。けん禱ハきつゝ紙の外影ありしと  
いほ。丈夫今世ハ好まやくあまう貴人の  
おもふ入素人犯云の幕引をばとあ口上  
の云持とあいうお依の松云乃亦一とあう。扱  
持方よりアはくともや白むくの衣紋を付  
く。海いふ物よりくお役を當世ハ療治ふ

骨を折とるハけり。あけ形一もまやまハア  
あり。今の世は神祕も是よりあか。やく中  
何え正風解のこをすり似しれともさうハ  
何し。元正風点取とニタわしよりそのア多  
あまうよりけり。奇道も点さくけり。ま  
又をぬふる鳥とりけり。あまうあまうあまう  
一。一卷の内前後よりあまうあまう  
句より麻義もるを点さく。トヤ。當世の人

ちおのうひのよかともあはれはくき焦  
志の會を信し——あまひ八和哥の神人奉  
納の詔語又八和の翁の翁句よ様はる御を付く  
一卷をゆくのか八和哥三神の由とのめも  
おせろく——く。あまひ八和ととも何く公初よ  
敵とあまひと——はる初世終中一乃  
人の心も物毎もあつ——まかたはあつる  
あまひ——中傳もやとあまひ——あまひ

云りれた。二人りのめとあまひかんるひまもこの免  
し——御子新をうらまへく。さうあや  
ありをあまひあつるあまひをまひをまひ  
——養はまあはあまひくや。あまひのあまひ  
のまよのあまひのまけあまひをまひくあまひ  
よまひをまひくあまひ——下まひ——あまひ  
あまひまひくあまひあまひ——の婦人  
りあまひの——あまひ男女終中あまひあまひ



多んつ巻くやほく——あきゆを。今ま  
あ——（まじり）もあくゆ——もあき——  
も昔今の多のひもいせ。つ——（いん）傾城  
の海あやと玉子の回角ハあゆもの多と  
よ中——もさよあ——。男女ハ天地（てんち）の陰陽  
あり故（ゆ）子多（こ）畜（ちく）類（るい）や——も男女のワのち  
あま——（そのまじり）其道あ（そのまじり）のづ——あ——ありけりあり。  
あんぢぢ女帝あり——（いんち）けさ（いんち）は多のひや

さんや。子（こ）夜毎（よ）子（こ）かきほう（ま）記（ま）松（ま）心（ま）子（ま）まの  
せぬ男（おとこ）も多（お）ふ（り）あ（れ）を。あまこの男（おとこ）は  
中（ちゆう）子（こ）こら（ら）い（い）子（こ）かあ（あ）ゆ（ゆ）家男（け）あ（あ）く（く）かあ（あ）は。  
陰陽（いんやう）志（し）ぜん（ぜん）の道理（だうり）也。其（その）家（け）心（しん）まのあひ  
高（たか）実（み）をほく——（まじり）あ（あ）ふ（ふ）あ（あ）ま（ま）き（き）い（い）ま（ま）あ（あ）の  
あ（あ）あ（あ）と云（い）へ（え）き（き）也。（まじり）赤地（せきち）婦（ふ）のあま——父（ふ）  
母（はは）のお後（ご）ま（ま）く（く）縁（えん）をひ（ひ）ま（ま）も（も）せ（せ）ぬ男（おとこ）が  
夫（う）婦（ふ）ま（ま）り（り）。又（また）ハ（は）あ（あ）け（け）ら（ら）り（り）ま（ま）く（く）志（し）のひ

まふ不中　　、もなきまさらのるりあれを。

男めりく　　—　　さる命いのちをかけくおもひ伝つたへ

とも是くハ志や　　—　　の海とみ

くまごころ女を帝ののあま　　—　　男の中みくを

—　　めらるま　　—　　あまひはき　　—　　海

あま　　—　　あま　　—　　あま　　—　　あま

くあま女あまあま　　—　　あま　　—　　あま　　—　　あま

—　　其その風俗ふうそくゆるゆる所ところくくの遺ち傳つたれとも

おはれハあふ　　—　　あふれの名はまる所

むの　　—　　も今もあま　　—　　あま　　—　　あま

都みやこハ男女ともとも人ひと氣いきも　　—　　あま　　—　　あま

ちりもあふ　　—　　めく　　—　　人も百

争あらそいもあふ　　—　　や　　—　　あま　　—　　あま

ま　　—　　江戸ハ人の性さが何　　—　　あま　　—　　あま

女の　　—　　あま　　—　　あま　　—　　あま

づ　　—　　あま　　—　　あま　　—　　あま

中は一國の風俗さうさうくさうさうハ江戸新ノ吉  
 系也。我々れえ。世よは後々々々。かきりめ。何うも  
 とく千金万金をばささく心をほくく。一。ても。  
 其の如おををり。さか。一。あ。後。の。ま。く。ま。  
 多。の。は。負。か。お。か。よ。南。あ。と。を。ほ。く。く。一。一。く  
 急。一。を。々。が。い。の。中。に。ま。さ。か。し。ハ。ヤ。セ。一。也。  
 今。ハ。い。き。を。り。何。さ。う。ち。う。も。大。方。ハ。金。は。く。く。ま。  
 ま。の。如。お。も。金。を。さ。し。後。の。人。を。大。切。あ。一。一。く。か

席のい。う。も。ち。の。つ。う。く。急。く。ま。さ。や。う。ま。あ。う。又  
 其。の。さ。と。お。と。ふ。お。か。ま。く。も。金。を。い。は。は。く。ま。  
 り。も。あ。の。一。一。く。ま。れ。を。如。席。の。い。ま。も。何。と  
 かく。お。お。う。は。ま。さ。や。さ。あ。あ。う。川。さ。く。つ。後。ま。ま。  
 急。ふ。お。も。ま。か。く。金。を。り。也。む。の。一。一。ハ。以。後  
 一。く。何。ふ。お。ハ。き。う。か。ま。の。お。と。の。も。ま。ま。を  
 は。け。肉。は。く。の。一。一。も。せ。く。や。う。ま。一。一。後。と。も。  
 今。の。色。お。ハ。内。は。く。の。一。一。も。合。点。は。く。ま。く。何

とせしめたるうらみなくきりく大切に取あつてふ  
あり。やうもむの——ハ入り千金をほくのへる方  
金をばのふくをうい合ふとせんせいの大金と  
し傳ふと。今ハ是れをあげと名付金をとぬるの  
とす一の通ふと——傳ふ由へ三ヶ月の床花  
の時よりまのちの方うらむをやほるのをうらむ  
五あやましく所を三あまねく。女席もあつたの  
ほるのうらむをやま物のやうにおむ女席の方

うらむも別際もあま内子云ふく、あむ志んをも  
云ふれを。立合くみ——泣きいしむ方か  
ちるうらむ——あまへ——田舎の人むの——の風  
俗をすあがへあまへく江戸へ出く女席を賞  
てもあまへく子音をほけく。すれとさうか  
あむいしむうらむあやうらむ——あむいしむ人  
あむいしむ女席も茶屋舟着も対の外大  
切にほるや。是れ今の世に通ふをうらむは古風

を用ふる也。亦如帝のお出あらん——むくろく  
 ちく阿まんんまこと云ごん音ごんもまん実まよまひこ  
 いおとさもおひえはゆあれ伝る也。おろ月八  
 ろくふく外からうくはやくその終つひも其まお  
 の力ちからあ——くハ虚き実まそのまゆる也。床とこの内  
 りくざく——やく物のあるやくおあつて。いひ  
 ハるしよと連つれふりくまらハ音ねをともてせく  
 實まハ音ねをよびへうる也。あつん。云まくぬる  
 ちくもくちあ——く云まうくハ實まのちひらハ  
 おもい——と如帝のちひらハ何なにのまも  
 けのぬるまをいやくみ理り屈くつをほけく居  
 るハ如帝にあちれく居るやあのみちまよひま  
 ちま実まうく物ものれくちをよびふとおもふを  
 ちのつひまともあつて。まもほゆあれしるす  
 まく。あうくまひまやくりんハか——もあひ  
 りとちうあふ——。亦あちのちると如帝にあ

ちくもくちあ——く云まうくハ實まのちひらハ  
 おもい——と如帝のちひらハ何なにのまも  
 けのぬるまをいやくみ理り屈くつをほけく居  
 るハ如帝にあちれく居るやあのみちまよひま  
 ちま実まうく物ものれくちをよびふとおもふを  
 ちのつひまともあつて。まもほゆあれしるす  
 まく。あうくまひまやくりんハか——もあひ  
 りとちうあふ——。亦あちのちると如帝にあ

惚<sup>おぼ</sup>く初<sup>はつ</sup>会<sup>かい</sup>ありくゆ〜終<sup>しゆう</sup>〜三<sup>さん</sup>今<sup>いま</sup>月<sup>つき</sup>とふ  
ト〜〜〜〜〜めよとよそのぬち  
あしを。あし〜終<sup>しゆう</sup>のまか〜もおも〜  
や〜ぬ女<sup>にょ</sup>帝<sup>てい</sup>よりあハ〜ま〜うほく〜今<sup>いま</sup>  
膏<sup>たう</sup>のあ〜ハ〜ふ〜ハ〜あんとあ  
や〜危<sup>き</sup>角<sup>かく</sup>終<sup>しゆう</sup>〜ふ〜あ〜あ  
女<sup>にょ</sup>帝<sup>てい</sup>の方<sup>かた</sup>よりあ〜ぬち〜あ〜あ  
〜もあ〜〜〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜〜〜〜〜其<sup>その</sup>終<sup>しゆう</sup>〜あ〜あ〜あ  
〜〜〜〜心<sup>こころ</sup>も〜あ〜あ〜あ  
女<sup>にょ</sup>帝<sup>てい</sup>も〜あ〜あ〜あ〜あ  
何<sup>なに</sup>と〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ









多き命の何れもひらきくまひけはあ  
いふ命をもまらる程の中とあるはけ所あり  
よしくけさのひを多しぬれをまぬぬ女帝  
の命をくはらるるまき。わつらひの——今  
とくもかきう侍は客のあつと何——ま  
あか帝も何——あるや。又か——まわ  
まきくまはあせくはくくまやくひるまや  
ふんをほけまふ——女帝もくも女の情ま

多のひらきか——かあ——らくも後くく  
まきぬくちかひは。秋のく日のあつ時分  
かえりれを寝息をん——をまうゆや。年  
流る——くも女帝の中まきくもあ——  
あまきう化粧——よれあか女の常あり。  
又女帝の女帝は勿論外の女帝はあつを  
あつまうもつまぬや。ふんをほけ。あつと自  
情まの外の家乃女帝の善悪の評判——

とまふが<sup>か</sup>の<sup>り</sup>何<sup>ん</sup>様も女帝<sup>に</sup>の<sup>り</sup>終<sup>り</sup>を  
尺<sup>は</sup>の<sup>り</sup>林<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>物<sup>つ</sup>也。何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ハ<sup>は</sup>の<sup>り</sup>お<sup>の</sup>り  
る<sup>る</sup>ハ<sup>は</sup>の<sup>り</sup>お<sup>の</sup>りも<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>尺<sup>は</sup>の<sup>り</sup>終<sup>り</sup>  
際<sup>は</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>の<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>  
両<sup>は</sup>持<sup>ち</sup>の<sup>り</sup>取<sup>り</sup>也。何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>ハ<sup>は</sup>の<sup>り</sup>取<sup>り</sup>也。何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>

何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
ハ<sup>は</sup>の<sup>り</sup>取<sup>り</sup>也。何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
傳<sup>へ</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>は</sup>の<sup>り</sup>取<sup>り</sup>也。何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>  
何<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>終<sup>り</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>



かーむい蓋あ現るや。あらのきゆうり上るを  
はくーく金をさぬや。よまきまらうきも  
一國の風何れ入程ハソレも入也。我れは  
るーめよと流るきあきうの程を女即乃  
事もさるるくあうくおもー後。のしは  
換也とさう程あへー。女席もあふと何れを  
あつうー金のつぬや。いもーくまらるる  
あり。又かきあぬまらう女席もあひあう

とくぬやーめあおとまむあひのしは。我の  
あはくあ現女席ハんむのし何さあへー。海を  
ああるるあー。流るるよき女席もあひ  
あ時ハかーもあく換。は下月もあひんも  
換ひまらへー。よき女席ハあ程身者あひ  
あ持まらうあうをやはあひんあひりあを  
何あともや。我れしをああー。何れもあを  
女席もあくあのしは。ああく換。まらへ



其一日を面白く多岐——むを捲ひの事一  
 也——るを多くも倦——る捲ひもおも  
 ひの外不真ある事ある也。唯物を捲ふ  
 を捲ひと云ふ也。人も逢對するも二つを捲ひ  
 物もあつて後つて打ひあつて後あひそく  
 多岐あり——とくく——多岐あり。是二つの事取  
 るもん五つありとあるも古人訥子の秘傳あり  
 け三つの多岐を取るもつとくくを傳ふる形と。

ありくむの——の通りものとしてハ諸能なる  
 心つけあつくくハあつとつ——と昔今の物語  
 水をあつてあつとくく糸舌のさるやあつて人間  
 ことくくハあつてもこれにあらはれ仙女のか——ハ世と  
 感も多くと聞居るうちさ川と以てあつて木の  
 山嵐もあつてつた家居ハ清くせく。世中も二人  
 たりせんときくくハあつ——ぎのうへのお思儀也

古今野鉄炮

全部五卷

近刻

江戸名物史

近刻

江戸橋四日市

竹川藤助

板元

本所柳原共目

半田屋源三郎

